

イエスはペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人を連れてゲツセマネという所に行きました。この三人は十二人の弟子たちの中でもイエスに特に近い者として描かれています。34節の「わたしは死ぬばかりに悲しい」は詩篇 42:6 に由来すると考えられます。著者は、イエスの苦悩を単に現実的に描くのではなく、詩篇の記す「苦難の義人」の恐れと悲しみに重ねて記し、神さまの意志の実現であることと述べていると思われます。35節の「できることなら」はイエスが神さまの全能を疑っているのではなく、むしろ「神さまの意志にかなうならば」の意味と思われます。36節のイエスの有名な祈りでは、イエスの願いと神さまの意志が衝突しますが、結局イエスの受難が神さまの意志であることが確認され、イエスは、自分の願いではなく、神さまの御心に自らをまるごと委ねるのです。死は、あらゆる手段により回避したいが、それは最終的には受け入れられるべきものであり、少なくとも自分からつくり出されるべきものではないと、著者は記すのです。

弟子たちは三度眠ってしまいますのですが、何故、弟子たちは眠ってしまったのでしょうか。弟子たちは、イエスが向かい合っている苦しみがどのようなものかが分からず、その苦しみを共にすることが出来なかったのです。イエスが「目を覚ましていなさい」と言う時、それはただ肉体的に起きているということ以上のことを意味しています。また、「わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられない」と言っているのも、肉体的に疲れていて寝ってしまったということだけを意味しているのではないのです。弟子たちは、その時イエスが自分たちを救うために身代わりになって、裁きを受けようとしているとは思いませんでした。

38節の「心は燃えても、肉体は弱い」という言葉から私たちが受ける印象は「人間は、心では高い志を持っているが、肉体的には弱い、疲れている時の睡魔には勝てない」ということです。この「心」と訳されている単語は「霊」という意味の単語です。この意味にとると、イエスは、単に肉体的な弱さを咎めて、心身共に強くなれということを行っているのではないのです。ここでは、神さまの御心に対する人間の鈍さがいわれています。神さまの霊による救いの御業は力強く進められているが、人間の思いはそれを理解せず、むしろそれと異なることを考えてしまうということなのです。42節の「立て、行こう」という言葉は、眠っていたことに対する叱責よりも、むしろ弟子たちへの励ましとともに、神さまの御心に自らを委ねられ、決然と十字架へと立ち向かおうとするイエスの促しを読み取ることができるのではないのでしょうか。